

國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

家庭で子育てをする保護者の実情・実態と保護者支援のhandがかり

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學人間開発学会 公開日: 2023-02-06 キーワード: 子育て支援, 保護者支援, 外国につながる家庭, 孤立した子育て, 人材育成 作成者: 野本, 茂夫, 池田, 行伸, 石川, 清明, 夏秋, 英房, 山瀬, 範子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001397

家庭で子育てをする保護者の実情・実態と 保護者支援の手がかり

野本 茂夫 池田 行伸 石川 清明
夏秋 英房 山瀬 範子

【要旨】

本論文は、平成29年度國學院大學人間開発学部学部共同研究報告書を基にしている。近年、孤立した子育て環境の中で育児に不安や悩みを抱える保護者の存在や結果的に乏しい子育て環境の中で育つことになってしまう子どもの存在が危惧されている。そこで、本研究では、子育て世代の家族が多い國學院大學横浜たまプラーザキャンパス周辺地域を主な対象として、家庭で子育てをする保護者の実情や実態をアンケートやインタビューなどを通して調査を実施した。その結果、転入家庭が大半で、保護者が地域でのつながりのない孤立した子育ての実情・実態が明らかになった。また、そこから保育者養成教育における保護者支援の手がかりを得る試みとして、保育者養成教育の授業展開の中で、子育て中の保護者の講話とその保護者と学生との対話を取り入れ実施した。この授業実践を通して子育て支援の人材育成につながる学生の学びの深化が確認できた。

【キーワード】

子育て支援 保護者支援 外国につながる家庭 孤立した子育て 人材育成

I. 問題の所在と研究目的

筆者らは、平成29年度國學院大學学部共同研究費の助成を受け、國學院大學横浜たまプラーザキャンパス周辺地域の家庭における子育ての実情・実態について調査した。その調査結果の詳細や資料については、平成29年度國學院大學人間開発学部学部共同研究報告書「地域における子ども・子育て支援の実情と大学における人材育成のあり方」¹⁾にまとめている。本稿は、この報告書を基に報告書の内容を整理再構成し加筆修正を加え論文として執筆したものである。

國學院大學横浜たまプラーザキャンパス周辺地域は、少子化時代の中で、子ども人口が多い全国的にも希な地域である。また、大規模な東急多摩田園都市開発事業により生まれた青葉区や宮前区は、特に乳幼児や子育て世代の転出入の変化が大きい地域²⁾³⁾でもあり、子育ての受け皿対策が課題になっている。近年では、孤立した子育て環境の中で育児に不安や悩みを抱える保護者の存在や結果的に乏しく厳しい養育環境の中で育つことになってしまう子どもの存在も危惧されている。そこで、本研究では、横浜たまプラーザキャンパス周辺地域（横浜市青葉区、川崎市宮前区を中心とするその周辺地域）を主な対象として、家庭で子育てをする保護者の実情について

情報を収集し、その実態を明らかにするとともに、大学における子ども・子育て支援の人材育成が地域と連携しながらどのように展開できるのかその具体的なあり方を検討することを目的とする。

Ⅱ. 研究方法

1. 地域における子育て支援の実態調査

地域の子育て支援拠点施設及び子育て支援活動の実情について実態調査を実施した。

(1) 横浜市青葉区内の子育て支援拠点施設の調査（実施日：2017年11月24日）

- 1) 施設長のインタビュー（内容：地域子育て拠点施設の現状と課題、利用する親子の変化、他）
- 2) 施設を利用する保護者4名のインタビュー（内容：家庭での子育てについて、他）

(2) 川崎市宮前区での子育て支援活動の調査

- 1) 宮前区の地域住民が主導する子育て支援の聞き取り調査（実施日：2017年2月13日）。
- 2) 川崎市の外国人市民の子育て支援調査（川崎市国際交流センター所蔵資料の調査、平成27年度外国人市民意識調査報告書、外国籍県民かながわ会議の第9期最終報告書、他）。

2. 就園までの家庭での子育て状況

未就園児の保護者を対象に子育ての状況についての調査を実施した。

(1) 保護者アンケート（実施日：2017年11月～12月）

対象：たまプラーザ周辺地域にある幼稚園5園を利用する未就園児の保護者68名。

内容：アンケートの質問内容は以下の通りで、該当する項目の番号を○で囲む（複数回答可）。

- ①子どもは一人である。
- ②核家族（親と子）である。
- ③祖父母（未就園児から見て）、叔父、叔母等と同居している。
- ④祖父母等子育てを支援してくれる人が徒歩1時間以内に住んでいる。
- ⑤3～4歳まではできるだけ家庭中心で育てたい。
- ⑥できれば0～1歳くらいからでも保育園等に入りたい。
- ⑦市や区などで開催している未就園児の集まりによく出かける。
- ⑧幼稚園等で行われる未就園児の集まりによく出かける。
- ⑨保育所、託児所以外に未就園児が集まれる場所が少ないと思う。
- ⑩子育てについて気軽に相談できるところが少ないと思う。

(2) 保護者インタビュー（実施日：2017年11月～12月）

対象：たまプラーザ周辺地域の3幼稚園の未就園児クラスを利用する保護者22名。

内容：子ども・子育ての悩みや問題などの実情を半構造化グループインタビューによる調査。

あらかじめ用意した質問項目は、「この地域での子育ての感想は？」・「子育てで困った

ことはどんなことでしょうか。」・「お子さんの育ちのことで心配になったことはありますか。」・「子育てやお子さんのことで困ったとき、どこに相談しましたか。」・「子育てでどんな支援があればよいと思いますか。」・「大学がお手伝いできるようなことは何かありますか。」・「その他」

3. 保育者養成における地域の保護者との連携

保護者を授業に招聘し子育て体験講話と学生との対話を実施（実施日時：2017年12月21日 3 限目）。

- (1) 対象授業と対象学生：子ども支援学科 4 年後期開設の「教職実践演習」とその受講学生 (20 名)。
- (2) 招聘保護者：グループインタビュー対象者の中で協力が得られた保護者 2 名。
- (3) 受講学生との対話：保護者講話の後、授業担当者の進行で30分間実施し、授業終了後に学生の感想文と保護者の感想を得た。

4. 本研究における倫理的配慮

全ての調査において、施設長、保護者、学生に対して事前に口頭と書面により調査内容と方法、研究協力を取りやめたいときは何時でも申し出ることが出来ることを説明、依頼し、書面による承諾が得られた者を対象に実施した。また、本研究は、國學院大學「ヒト研究等及びヒト由来試料研究等に関する倫理委員会」の承認（ヒト研究・H29第8号）を得ている。

Ⅲ. 研究結果と考察

1. 地域の子育て支援の現状

(1) 地域子育て拠点施設の現状

1) 調査協力を得た施設の概要

青葉区地域子育て支援拠点R（以下、「拠点R」と表記。）は、NPO法人「パ〇〇ト」が青葉区の委託を受けて、区との協働で運営をしている。東急田園都市線「A駅」の近くにあり、火曜日～土曜日の午前9時から午後5時まで利用することができる。利用者は0歳から未就学児とその家族、妊婦とその家族、子育て支援者であり、「青葉区みんなで子育て」をモットーに「子育て中のママやパパその周りで子育てを支える支援者も、みんながこの場でつながり合いここに来るとホッとできる」場づくりを行っている。そのため、「拠点R」は、ひろば、子育て相談、情報の収集と提供、ネットワーク、子育て支援の人材育成、横浜子育てサポートシステム、横浜子育てパートナー（「拠点R」HPおよびリーフレットを基に整理）の7つの役割を持っている。

2) 調査の結果

① 施設長のインタビュー

施設長からは、「拠点R」の中で課題になっていることとしては、5年目に青葉区と法人、学識経験者で行った振り返りを基に2点、回答があった。

・「拠点R」の存在を地域の人たちに知ってもらうこと

ネットワークを作っているつもりであったが、まだまだ知らない人がいる。地域の人で当事は知っているが、子育て後の人や関係ないと思っている人に対して施設の存在を周知することは難しいが、それをやっていく必要がある。子育てのことを思い出してもらって、電車の中とか、泣いても電車に乗っていいよという雰囲気を作ってもらえるような街にしていきたい。

・0～2か月の親子への支援

青葉区だけに限らないが、復職までの期間が短くなっている傾向がある。ひろばを利用する期間も短くなってきている。ひろばができたころは、0・1・2歳の子育て家庭に向けて行っていたが、今、2歳児はほとんど仕事をしているか、プレ幼稚園があるのでそちらに所属されている。ひろばを利用する人は無所属の人がよりどころとしてくる。その年齢がどんどん低くなっている。昔は0・1・2歳だったのが、今は0・1・2か月。0・1・2か月の親子向けのHPを作ったり、妊婦さんへの情報を伝えたりしている。妊婦さんに知ってもらえれば、出産後、電話してSOSを出すことができる。

利用者の親子を見て感じる変化については、3点回答があった。

- ・出産を機に産休育休もいるけれど退職する人もいる。育休の人は復職すればいいけれど、退職した人も新しい仕事をいつか見つける。いつでも社会復帰できる雰囲気にしないと、何か、悪いことをしているように捉えられてしまっている。自分で復帰のタイミングを決めるのではなくて、働かざるを得なくなっている。子どもといたいけれど、復帰せざるを得ない。子どもと一緒にいたい人がいるなら、慌てなくてもいいよっていう社会になってほしい。
- ・妊娠中から保活（保育所探し）をする。3歳になれば幼稚園もあるし、どこかに所属できる。そこに行くまでは無所属でもいいじゃないって雰囲気が必要。0・1・2歳まではいいよって人がいてもいい。産休明けで働く道を選んだ人はもちろん応援したい。「拠点R」は多様な子育てを応援する場。自由な国でありながら縛っているのは何だろうと思う。
- ・生活する力が不足している。家事とか育児とかもその一つだと思うけど、お勉強以外の体験が少ない人が多いと、子どもが生まれて困ることになるのでないかと思う。体験が足りない人が多い。離乳食のゴールはママと同じものが食べられることが分かっていない。何か、特別なものになっている。大人の食事と離乳食が結びつかない。料理って、男女を問わずご飯とみそ汁くらいは作れた方がよいと思う。いろいろな知識はたくさんあるけれど、それと実際が結びつかない。

② 利用する母親のインタビュー

楽しさや面白さとしては、「予想していない反応があったとき。楽しさや面白さが思っていたのと違う反応が返ってきたとき。」「できないことができるようになると感動する。」「作ったものを全部残さず食べてくれること。」「そばにいて子どもの成長が日々感じられるのはうれしい、新しい発見もあって楽しい。」という回答があった。

困っていること、悩みとしては、「自分の体調が悪い時に、全然外に出られなくなったりして、日常生活が大変。」「ファミリーサポートも知っているが、登録するのに手続きがあって、使いたいときに使えない。」「離乳食の進み具合が心配。早く大人と一緒に食べてほしい。いつになったら食べてくれるのか悩む。」「いやいやが出てきて、自分のペースで動けないことがある。」「引越してきたのだけれど、ここでは周りに知っている人なくて、孤独だなんて思うときがあった。」「プレ幼稚園はいっぱい入れてない。2歳の子どもの居場所がない。」という回答があった。

3) まとめ ～ 大学の人材育成に向けて

母親のインタビューでは、子育てに楽しさを感じる一方、他者とのつながりやサポートを求める様子があった。施設長のインタビューからは、無所属の親子へのサポートの必要性とともに、地域社会全体がそれを支える考え方を持つことの大切さがわかる。大学における保育者養成においては、利用する親子の状況を把握し、支援が行えるようなカリキュラムとともに、学生自身が親になったときに生活者として子どもとともに生活を作ることができるよう、生活する力をつけるためのカリキュラムも必要だと考えられる。

(2) たまプラーザ周辺地域の子育て支援活動～川崎市宮前区を中心に～

1) 川崎市宮前区における子育て支援

川崎市宮前区は田園都市線の開通とともに計画的な開発が進められ、平成29年で人口は約22万人、世帯数約9万5千世帯である。宮前区外への通勤者が約7万人いて通勤者の約7割に上っており（平成22年国勢調査）、昼夜間人口比率は74.3%と川崎市内では最も低い。また、比較的若い世代が多く住み、年齢構成をみると川崎市内で14歳以下の人口割合が最も高い区でもある。また、転入出が6%と毎年多いことも宮前区の特徴であり、とくに子育て中の世帯の転入出が多いため、住民相互の関係が希薄で新旧住民の交流が少なく、地域活動への関心が低いなど、地域コミュニティの形成が難しい地域もあるといわれている。子育て世帯は地域住民や団体・組織とのつながりが希薄であるとともに、生活情報が届きにくく、また支援する側にとっては生活実態が見えにくいという特徴をもっている。

若い世代の転入出が多いことによる子育て支援の課題に対して、宮前区では未就学児のいる転入世帯への支援が行われている。宮前区子育て支援関係者連絡会が中心となって、「ウェルカムみやまえキャンペーン」、転入時に区役所で、また新生児誕生の場合は民生児童委員が当該世帯を「こんにちは赤ちゃん訪問」を実施し、地域の子育て情報紙『みやまえ子育てガイド とことこ～幸せなパパやママになるために（2017/2018）』『とことこおでかけマップ（2017/2018）』を

渡している。宮前区には、「カンガルー宮前子育てねっとわーく」という20年来の会があり、保健福祉センターや「子ども文化センター」など区内6カ所で「赤ちゃん広場」という母親と子どもの友だち作りの場を毎月1回開いている。そのほかに、民生・児童委員や保育士が自主的にサロンや交流会を区内13カ所で開いており、さらに子育て中の母親たちが自主的に運営・活動している子育てグループや自主保育グループ、外遊び広場、子育てネットワークなどが活発に活動している（『みやまえ子育てガイド とことこ』50-55ページ）。

2) 外国人市民・保護者に対する子育て支援～川崎市での提言と先行研究

川崎市は「多文化共生」という用語の発祥の地であるとも言われ、在日韓国・朝鮮人の人権保障の取り組みを端緒に、近年ではニューカマーと言われる多国籍の移住・定住者への生活支援が行われている。しかし、外国籍の子ども、もしくは日本国籍であっても外国にルーツをもつ子どもと家庭の実態は見えにくく、日本語の使用や就労状況によって子育て支援も届きにくい状況にある。

また川崎市では約3万5千人の外国人住民の意見を市政に反映させるために、川崎市外国人市民代表者会議が組織されており（公募制、任期2年、第11期は18カ国、26名）、特別職の地方公務員として年4回会議を開催し調査審議を行い、年次報告と市長への提言を行っている。2016年度の代表者会議の報告書から、オープン会議における子育て支援と保育・幼児教育にふれる発言をまとめると以下のようなことが挙げられていた。

・「保育園に子どもを預けることを心配に思う保護者の不安を解消できたらいい。」・「日本人も同じだが、保育園に入りづらい。幼稚園も入りづらい。」・「子育てをしているOB・OG会があるといい。」・「外国人も気軽に参加できる子育て広場が必要だと思う。」・「身近な所に外国人の保護者たちの交流のサポートがあったらいい。」・「子どもたちが母語で交流できる場所が非常に少ないし、交流できる場所がない。」・「小学校就学前の日本に来たばかりの子は日本語が分からない。」・「子どもたちが日本語を学ぶ場所が少ない。学校やわくわくプラザ、町内会館等、地域に密着して通いやすい場所でないか。」・「保育園・幼稚園と学校をつなぐ仕組みができるといい。」

『平成27年度外国人市民意識実態調査（インタビュー調査）報告書』⁴⁾（平成28年3月 川崎市市民・子ども局人権・男女共同参画室）の「第6章：子育てをめぐる課題」によると、まず、外国籍保護者は外国籍であることに由来する固有の諸問題と、日本人に共通した問題とを重層的に負っていることが指摘される。つぎに出産については、困難な状況のなかで多くの不安を抱えながら、出産後の子育ての不安を分かち合い、情報交換できる仲間が必要であることや、経済的負担について健康保険への加入などや出産育児一時金など、利用できる制度の情報の入手と申請に至るまでの難しさが、外国人保護者に特有な問題として指摘されている。子育て支援情報と制度へのアクセスの向上が課題である。

今後の支援の課題とネットワークのあり方の課題として、つぎのように指摘している。

「新たな取り組みとして、地域で子育てについて話し合える関係性を築くこと、同国人同士のネットワークの構築など、外国人保護者が必要としている子育てに必要な社会関係を築ける場や仕組みづくりが(中略)ソフト面での支援につながる重要な役割を果たしていく可能性がある」(35ページ)。

3) 外国籍県民かながわ会議（第9期）の提言

神奈川県にも川崎市と同様に「外国籍県民かながわ会議」が組織されており、それぞれの期で報告書がまとめられている。その第9期の最終報告（2016年10月）「一歩先への多文化共生神奈川を目指して」の提言⁵⁾の2つ目に、「外国人へ保育園利用の啓発と保育園等における多文化対応の推進」を掲げている。それは、「①外国人への保育園等利用の啓発」と「②保育園等における多文化対応の推進」である。

この「かながわ会議」の提言では、就学前教育が子どもの成長と学力獲得、社会参加に最も重要なものであることを指摘すると同時に、次のように述べて危機的状況であることを訴えている。

「外国につながる家庭で育った子どもは、小学校入学時に、日本語の言葉や日本での社会のルールなどの理解に、日本人との差が生じています。さらに、小学校以降での学習でも差が出てしまい、人との交流ができず、小学校以降で必須な集団生活ができないことがあります。」「その結果、学習が遅れて、高校に進学ができず、その後の自分の力で学習しようとしても、ステップアップすることが難しくなります。このようなことを防ぐためにも、専門的な保育サービスを受けることが必要であると考えます」。

このように、文化的剥奪状況に対して補償教育を行う発想に基づいた提言がなされている。さらに、この第9期のかながわ会議の委員長であった中村ノーマン氏は、國學院大學でゲスト講師として話をした際に、外国人家庭に対して、より直接的な文化的・教育的支援を行うべきであることにも言及している。

2. 就園までの家庭での子育て状況

(1) 保護者アンケートの概要と小考察

1) 保護者アンケートの概要

たまプラーザ周辺地域の幼稚園5園で実施し、合計68名の未就園児の保護者から回答を得た。アンケートは、①から⑩の10項目があり、その質問内容は、図1から図10の表題に対応し、保護者が該当する文言に○をつけるという方法で行ったので、「いいえ」というような積極的な否定は測定されていない。①の項目のみ1園で回答が得られず、保護者が55名となっている。

①一人っ子の割合：図1が示すように子どもが一人と回答した人は、27%であった。

②未就園児の家庭状況：図2が示すように96%の家庭が核家族で、近隣に子育てを手伝ってくれる肉親がいない。

③祖父母との同居：図3が示すように、祖父母など親族と同居しているものは1名である。

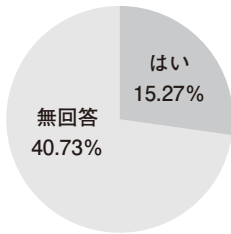


図1. 「子どもは一人である」の回答数および回答割合

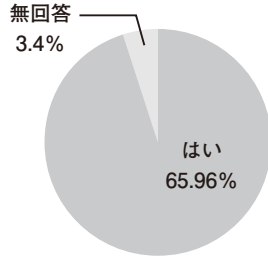


図2. 「核家族(親と子)である」の回答数および回答割合

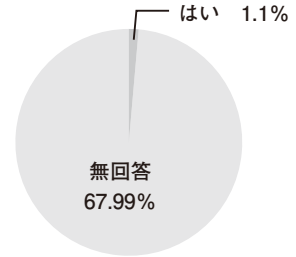


図3. 「祖父母(未就園児から見て)、叔父、叔母等と同居している」の回答数および回答割合

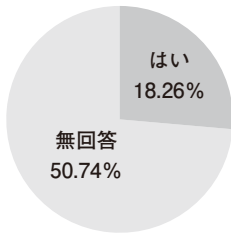


図4. 「祖父母等子育てを支援してくれる人が徒歩1時間以内に住んでいる」の回答数および回答割合

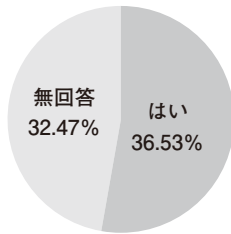


図5. 「3~4歳まではできるだけ家庭中心で育てたい」の回答数と回答割合

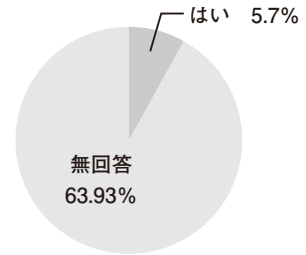


図6. 「できれば0~1歳くらいからでも保育園等に入りたい」の回答数と回答割合

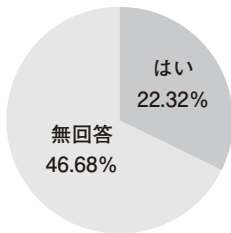


図7. 「市や区などで開催している未就園児の集まりによく出かける」の回答数と回答割合

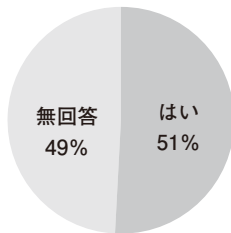


図8. 「幼稚園等で行われる未就園児の集まりによく出かける」の回答数と回答割合

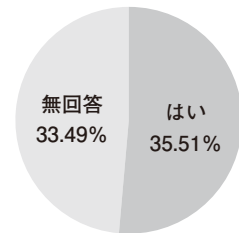


図9. 「保育所、託児所以外に未就園児が集まれる場所が少ないと思う」の回答数と回答割合

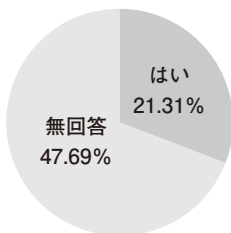


図10. 「子育てについて気軽に相談できるところが少ないと思う」の回答数と回答割合

注) アンケートは、①から⑩の10項目があり、その質問内容は、図1から図10の表題に対応し、保護者が該当する文言に○をつけるという方法で行ったので、「いいえ」というような積極的な否定は測定されていない。①の項目のみ1園で回答が得られず、保護者が55名となっている。

- ④近隣に親族の有無：図4が示すように四分の一強が近隣に祖父母等の子育て支援者がいると回答しているが、残り四分の三は祖父母等の近親者が近隣に在住していないことを示している。
- ⑤家庭での子育て：図5が示すように半数強が3～4歳までは家庭中心で育てたいと回答している。
- ⑥保育所入所希望：できれば0～1歳からくらいからでも保育園等に入れたいと答えた人が5.7%いた。
- ⑦、⑧未就園児の集い：図7が示すように約三分の一が市区の未就園児の集いによく出かけると回答している。また、図8が示すように約半数が幼稚園等の未就園児の集まりに出かけると回答した。
- ⑨未就園児が集まる場所の不足：図9が示すように約半数が未就園児の集まれる場所が少ないと思っている。
- ⑩子育て相談の場：図10が示すように、三分の一弱が相談できる場所が少ないと回答している。

2) アンケートのまとめと小考

対象となった未就園児の家庭はほとんどが核家族で親子以外の親族と生活している人はごくまれであった。その人たちの30%強が市や区の未就園児の集まりに出かけ、50%強が幼稚園等の主催する未就園児の集まりに出かけると答えている。そうすると残り半数近くがほとんどの時間母子で過ごしていることとなる。また半数以上が保育所、託児所以外に未就園児が集まれる場所がないと回答している。未就園児を持つ親は多くの時間を母子で過ごし、日中は母子で過ごせるところに出かけようとするが、その場所が少ないと感じていることが分かる。

表1. インタビュー結果の整理

②妊娠・出産前後から乳児期	a.第1子の時は、全く育児情報がない。
	a.出産までは、保健師の訪問、1ヶ月検診までは実家の母親がいてくれる。
	b.その後、サポートがなくなり誰とも話さなくなる。 b.生後1ヶ月の間、外出できない時期は、心理的に不安定になる。 b.誰とも話さなくなる。いつ寝ているのか分からなくなる。
	c.子どもが歩けるようになるまでは、外出も出来ず孤独になる。 d.子どもとやりとりや話が出来るまでは辛かった。
③現在の生活	<就園前>
	a.友達（母親の）が欲しい。おしゃべり相手が欲しい。母親同士で話す機会が就園までない。
	b.子どもとの家での遊びは2時間が限度だ。家事もあり自分の時間がとれず、子連れでの通院・買い物にも苦勞する。 b.外出先で子どもと安心して利用できる場所が意外と少ない。
	b.睡眠時間がとれずストレスがたまる。一日子どもとしか話していない。 b.利用しやすい子どもと行ける場所が近くに少ない。
	<就園後>
	c.情報がどんどん入ってくるので孤独感が解消する。 d.ママ友も出来るようになる。 e.公園があっても休憩できない、トイレの使いにくさがある。仲間もいないと利用し難く余計孤独を味わう。
④その他	a.引越してきたときは情報がなく、調べに調べて子育てサロンなどの情報を探して近所に知り合いを作りたくて行っていた。
	b.働こうと思ったけど、保育所はいっぱい、託児所付きの職場も探したけどないに等しい。子どもを預かってくれるところはあっても1時間千円では、働く意味がない。 b.預かり保育に登録していても必要ないときにいっぱい受け入れてもらえない。短時間でも気楽に預かってもらえるところがない。
	c.帰ってくるのが遅いし、疲れただし、もう言えない。母親の鬱憤が解ってくれる人が同じ家にはいないのがさみしい。
	c.仕事をして帰ってくるのだから、やっとうと申し訳ないって気持ちになるから、だったら自分でやった方がいい。

（2）就園までの家庭での子育てインタビュー

調査した3園の保護者の子育て環境は比較的共通しており、結果の整理にあたっては園ごとに分けることはせずに類似する内容ごとにまとめた。また、インタビューで話題となり記録された内容のうち、代表的と思われるものをできるだけ話された表現を尊重して採用し、発言の内容や趣旨が同一であると判断できたものは省略した。

1) インタビュー結果 ～就園までの家庭での子育て

①「家族構成及び家庭環境の特徴」は、1歳～2歳児が1名あるいは2名いる母親、及び兄弟が幼稚園に通園中の子どもがいる専業主婦、父親は自宅外に職場があり平日の自宅は母子のみとなる。家族構成については、いわゆる核家族（祖父母との同居なし）で、特別な支援を要する子どもはいなかった。また、第1子の出産によって家族が増えるのを機に、子育てがしやすい地域と思って現在の居住地に引っ越しをしている者が多かった。地域全般に子育て世代の転勤族が多い傾向にあり、実家や親族と離れた生活環境にある。実家が比較的近隣にあるという家庭もあったが、「すでに親が年配で足腰が弱っていて見続けられない」とか「仕事をし続けていて見られない」とか「両親の予定があって1ヶ月位前に予約しておかないと難しい」という状況にあった。

以下、話題は、現在の育児に関することに始まる81の話題があり、以下に示す②から④のように整理できた。表1.には、インタビュー結果をまとめ、②、③、④についての代表的内容を整理し示した。

②「妊娠・出産前後から乳児期」については、a.育児情報・出産前後のサポート、b.産後の孤立、c.孤独な子育て環境、d.子育ての辛い孤独感など母親の子育ての思いの推移として整理された。

③「現在の生活」については、a.幼稚園での母親同士の出会い、b.通院・買い物などでの苦勞、c.生活情報の取得、d.ママ友、e.公園、f.支援等々などの生活場面ごとに整理した。

④「その他」はa.子育て情報、b.就勞、c.夫の家事・育児参加などに分けて整理された。

（3）家庭での子育て状況のまとめと考察

就園までの家庭での子育ての現状と問題について次のようにまとめることができた。

- 1) この地域への転入家庭が目立つ。出産後の転入、転入後に始まった子育てと新しい地域での生活と子育てが重なり、親や親族、知り合いもなく、家庭が地域で孤立する心配のある状況がうかがえる。
- 2) 保護者の求めている情報は、同年齢の子育て環境にある話し相手や子どもと一緒に出かけられる外出先などであった。子育てについて話題を共有できる話し相手とその場を求めている。
- 3) 出産前後は、実家からの支援を受けているが、母親が一人で育児を行う状況となる生後1か月ころまでが不安定となり、この時期の支援が特に重要である。
- 4) 支援者が常駐する親子で行きやすい施設が近隣になく沢山の子育て支援施設やその制度があっても、保護者が子育ての支援を得ることが難しい状況にある。通院など保護者の家族の事情で一時保育や預かり保育が必要になっても、受け入れてもらえることが容易でない。

- 5) 子どもと長時間、二人きりで生活するという子育て環境が共通して見られ、この孤立した家庭状況が保護者の精神的なストレスを大きくしている様子がうかがえる。
- 6) 子どもと二人だけで過ごす孤立した子育ての日々は、イライラが募って子どもが悪くないのに子どもにあたってしまい自己嫌悪に陥ることがあるとの訴えもあった。
- 7) いわゆる「ママ友」には、子育てをサポートし合う関係では無く、日常生活のたわいもない事や日頃の子育てや家事の鬱憤などをおしゃべりができる関係を求めていた。
- 8) 子育ての安定した環境を得るまでは、多くの母親は、就園を待たなければならなかった。幼稚園に入園することで、恒常的な保護者同士の関係が育まれて、孤立感がなくなっていくようである。
- 9) 日常生活では、便利な生活ができる地域だが、乳幼児と一緒に買い物や食事に出かけると、安心して入れるお店が少なく、外出先で利用できる場所が意外に少ないなどの問題や課題があげられた。
- 10) 夫が皆通勤する働く世代であり、帰宅時間が遅く出勤時間は早いという共通点があり、自宅で子育てに協力してもらい難い状況が語られている。その結果、「ママの鬱憤がわかってくれる人が同じ家族にいない」というさみしさが訴えられ、家庭でも孤立する母親の子育て状況がうかがえた。
- 11) その他、第2子の出産を躊躇させる育児支援体制の不十分な状況が具体的に指摘された。

以上のように就園までの家庭での子育て状況を整理することができた。今回のインタビュー調査で、公園や児童館の整備、それらの情報の発信が一つの問題として浮上した。もう一つ明らかになった問題は母親たちに強い一時預りの要望があるということである。母親たちは核家族で夫や親族の支援が受けにくい状況にあることがアンケートでも浮き彫りにされていた。一日24時間、365日子どもとだけ向き合っていれば精神的健康がむしろまわれることもあろう。社会で活躍した後、出産、育児のため社会から離れ、ほとんど自宅で過ごしている母親が再び社会とつながりたい、社会参加したいという要望は当然だと思える。大学は一時預りシステムなどの新たな子育て、母親支援についてどのような教育理念と教育方法で子どもたちを育てていくか多方面にわたって研究しておく必要がある。

3. 授業での子育て講話と保護者と学生との対話

保育者養成教育における地域の保護者との連携について、インタビュー調査に参加した保護者を授業に招聘し、子育て体験講話と学生との対話を実施し、保育者を目指す学生に与える効果を検討した。

(1) 本授業時までの経緯

今期の授業においては、地域の子育て支援の取り組みについて理解を深めることを授業で取り組むテーマの一つに挙げ15回の授業の中、4回分を当てた。1回（10月12日）は、公立保育所園

長による「青葉区内の保育所が行っている地域の子育て支援の取り組みについて」と「学生が青葉区の子育て広場にボランティアとして参加する『N広場』についての説明と当日の役割」、2回・3回（11月9日8:30-13:00）は、『N広場』での子育て支援活動に参加し親子とのかかわりを体験、そして、4回目（12月21日）が、「子育て講話と保護者と学生との対話」である。この4回の授業では、欠席者はなく受講者全員参加した。

（2）保護者2名の講話と学生との対話

保護者2名で正味約45分間の講話であった。講話の主なテーマは、「保護者の幼児教育への関心と保育者への期待」、「地域の子育て事情」、「ワンオペ育児の大変さ」、「ママ友の実態」、「夫の家事・育児への参加の実態について」などであった。講話の具体的内容は、未就園児保護者インタビューで話されていた内容をより詳細にしたものであった。保育者を目指す学生に、保護者としての期待と思いを込めて、かなり率直に心の内を語る内容であった。

保護者の講話後に、受講学生から質問と感想が述べられ、その一つ一つに対して保護者から回答があった。授業時間に制限があり、学生と保護者との対話時間は、約25分間であったが、学生全員が意見や感想を述べた。

（3）受講後の学生の感想文

授業終了直後に学生に感想文を求めた。ここでは、その中で保護者支援の理解に関わりが深い内容を「保護者理解の深化」、「家庭理解の深化」、「保育者使命感の深化」の3つに分類し、その代表例を示した。

1) 保護者理解の深化

- ①保護者の方がかかえている思いは自分が想像しているものよりもとても複雑で大きなものだということが分かりました。…中略…また、保護者の方同士のつながりも子育てをしていく上でとても大きな役割を果たしていることが分かりました（Dさん）。
- ②特に母親は、一人で子どもに関わる場面が多く、それは一日中、一年中にもわたるのだと聞き、自分に置き換えてみました。悩みがあるのに誰も相談できなかつたり、やらなくてはいけない事ややりたい事があるのに子どもから目が離せなかつたりと、自分の時間がないということは耐えがたい苦痛なのではないかと強く感じました。だからこそ「先生」という立場に立ったとき、保護者の方に頼っていただけるような存在でありたいと思いました（Eさん）。
- ③保育士や幼稚園の先生は、日々仕事に追われていると自分だけが苦勞していると思いがちだが、保護者はそれ以上に子育てで苦勞して悩んでいることを忘れずに親身になって子育て支援を行っていきたいと思います（Jさん）。

2) 家庭理解の深化

- ①話しの中ですごく印象的に感じることは、夫婦関係のことやママ友のお話で、人間関係で悩みをかかえることが多いということです。子育ての中だけでも大変なことが多いのに、支えとなるはずの周りの人間関係に悩んでしまうと、本当に素直に相談できるのは、専門性のある保育

者となるのだろうと思います。改めて、保育者としての責任感を感じ、話を聞くことを大切にしようと思いました（Aさん）。

- ②夫婦の子育ての関わり方について深く考えさせられました。父親は仕事で精一杯なため、なかなか子育てにまで目を向けられない方も多くいると思いますが、その状況を子育てに精一杯な母親が気持ちを理解というのは心に余裕がないと難しいと思います。一方、母親の子育てについても、仕事に必死な父親は目が向けられない可能性も多くあります。両親の子育てを巡るトラブルの根底にあるものは、心の余裕のなさであり、そのことは夫婦の関係性を崩す原因になると思います（Kさん）。
- ③保育所でアルバイトをしている際、お母さんの送り迎えを当たり前と忘れてしまっている自分に気付きました。お父さんが送り迎えをしている家庭を見ると協力的ですごいなと思っています。けれど、実際は、毎日送り迎えをしたり、分担したりしているお父さんもお母さんもすごいのです。私は分かっているつもりでしたがそうではなかったことに気付かされました（Lさん）。

3) 保育者使命感の深化

- ①教師になった際、今日のお話を忘れずに保護者の方に寄り添いたいと思いました。寄り添うというのも、ただ、不安や不満を共感するというだけではなく、教師という責任を持って正しいアドバイスをすることも必要だと感じました。今日の話を通じて教師としての専門性を高めていきたいと思いました（Bさん）。
- ②相談する相手がいないことへの不安やストレスが想像していたよりも大きいと分かりました。相談することのできる保育士の存在が保護者にとってとても大きいのだと改めて実感しました。新任の保育士が相談にちゃんと対応できるのかという不安が私の中にもありましたが、上手く応えられなくても対応を考えてみたり、先輩保育士に聞いてみたり、親身になって話を聞くなどできることはあるのだと少し安心しました。保育をするというと、子どものことばかりに目が行ってしまいますが、保護者支援も大切なのだと実感し、保護者とのかかわりを大切にしていかなければならないと思いました（Fさん）。
- ③母親が抱えている問題は、思っていたより沢山あって、頼りになる人が少ないのは深刻だと思った。だからこそ、保育士や幼稚園教諭は頼れるべき存在でいなければならないし、孤独な母親の支えになる必要があると痛感した（Iさん）。

(4) 授業後の保護者の感想

講話及び学生との対話を終えた後で、保護者より以下の感想があった。

- ①現状を伝えることができればと思いマイナスなことを多く話したけど、それを「理解して心に入れて現場に行こうと思います」という言葉が聞けてよかった。
- ②「子どもに対する接し方だけじゃなくって、親御さんのフォローもしていきたい」という言葉が聞けすごくうれしかった。話してよかった

③ママは、孤独。もちろん友達がいて話をしてスッキリということはあるけど、実家の親って頼り辛くて、私の友達も旦那さんの実家の隣に家を建てたけどベビーシッターを頼んでいるんです。だから実家には頼らない。実際、親類に頼る家庭ってすごく少ないんじゃないかなと思うので、保育所とかに勤められるという方（学生）を本当に頼りにしているって事を知っていただきたかった。

（5）保護者と学生の対話のまとめ

保育所、幼稚園等で保育者が「子どもはいいんだけど、保護者との関係が難しくて」、「子どもより保護者の方が大変で」、「保護者対応で悩んでいる」等の訴が頻繁にささやかれる。学生は、その姿に実習で触れることから保育現場での保護者対応に不安を感じている。また、学生が実習で保護者に深く関わり対応することはない。日常生活の中でも子育て中の保護者の実体験を聞く機会も悩みや問題に触れる機会もない。こうした保育者志望学生を取り巻く環境の中で、大半の授業での学びが展開している。

子どもや保護者と一番関わりの深い保護者の実態を知らないままで健全な保育活動や子ども・子育て支援は難しい。今回、実際に子育てに取り組んでいる保護者に関わり、子育ての悩みや問題に触れた体験は、学生の保護者理解に影響を与えた。実際に家庭で子育て中の保護者に関わり、子育ての悩みや問題に触れた体験は、学生の「保護者理解」、「家庭理解」、「保育者使命感」の深化に影響を与えていた。そして、学生が子育てする保護者の悩みや思いを直接聞く体験は、これまでの想像を超えたところに保護者の姿があることを実感し、ようやく子育てについて共感的理解が生まれてきていた。保護者の感想にもあるように、保育者を目指す学生に保護者の思いを知って、保育現場に育ってきてもらえることが、保護者の望んでいることであり、子育ての安心にもつながると考えられた。

学生が保護者の思いに触れる体験は、子育て支援ができる人材を育成していく上で必須であり、カリキュラムの一部として取り入れていく必要があると考えられる。そのためには、どのような方法で保護者と関わる体験を保育者養成教育の中で実現して行ったら良いのか具体的に検討を進めていくことが急務である。

IV. 総合考察とまとめ

本研究を通して、たまプラーザ周辺地域の家庭で子育てをする保護者の孤独な子育ての実情・実態が浮かび上がって来た。調査に協力した保護者の大多数は、もともこの地域に生活基盤がなかった転入家族であった。そのため土地勘もない中で、子育てに役立つ必要な情報や支援をほとんど役立てられない状態で育児を始めている。出産後も乳児を抱えて家庭で孤立する状況になり、子育てに必要な情報取捨や周りの人との関わりや支援が得られにくい事態に陥る傾向にあった。この危機的状態を家族で共有して欲しくても、頼りにしている夫は、仕事に取られ育児に取り組む余裕がなく頼ることが難しい。その結果、母親一人での「ワンオペ育児」に陥りやすいと

いう実情が理解できる。子どもの成長とともに外出することが可能になってくるものの、地域に生活基盤がなかった親子は、1日のほとんどの時間を母子だけで過ごすことになり、社会から切り離されたような生活状況に陥り、保護者の子育てのストレスは増大し、その鬱憤が子どもに向けられてしまう事態も危惧される状況にあった。

本来このたまプラーザ周辺地域には、公園や子育て支援施設は数多くある。しかし、現実の親子にはその使い勝手があまり良くないという実態が浮かび上がっていた。施設の数はあるけれども、実際に利用してみると地域で繋がりのない孤独な子育て状態の親子には、支援者がいないとそこでも孤立する状態にあたり、利用しようにも幼い子どもと一緒に過ごすには利用する親子の実情にあった設備が整っていなかったり、利用し辛い環境であることが保護者のインタビューで指摘されている。一方で地域子育て支援拠点のように利用したい施設は、数が少なく自宅から遠かったり、予約が必要だったり、気楽に利用できない状況にある。特に母親の要望が高かった一時保育（一時預かり）については、必要な時に受け付けてもらえない予約ができないなど、現実的に利用したい保護者にとっては機能していない実態がうかがわれた。

子育て支援の研究に取り組んでいる大豆生田は、子育て支援型社会を構築する課題について、「最も重要な点は、保育の場が、子育てを地域で支え合う共同的な場として機能することであり、ここに現代の日本における保育の場の子育て支援の大きな課題がある」⁶⁾と指摘している。まさに大豆生田が指摘していることが、たまプラーザ周辺地域の子育て支援の課題になっていると言える。家庭で子育てをする保護者は、地域にある数多くの保育施設が、子育てを支え合う共同的な場として頼りになり信頼できる場所として機能してくれることを願っているのである。その実現のためには、家庭で子育てをする保護者の実情・実態を深く理解する人材の育成が必要になる。

ところが、こうした家庭で子育てをする保護者の実情・実態は、保育者を志向している学生には、授業や保育実習、教育実習体験からでは気づかれ難いものであった。しかし、直接、保護者から子育て体験について悩みや問題を聞く体験は、学生の保護者理解に大きな影響を与え、これまでの保護者の見方に変化を起こしていた。このように保育を志向している学生が、保護者に直接関わることを通して保護者理解や子育て支援について具体的に探求し学びを深めていくことは、現実に子育てをする保護者の危急の実態から見ても保育者養成教育の中で、今直ぐに必要なこととして受け止めていかなければならない。そのためには、保護者支援に関わる実践的体験が計画的に行われる仕組みを保育者養成教育の中に組み込んでいく必要がある。しかし、保育実習や教育実習のように学外の施設で指導を依頼する中で、保護者に関わる体験を織り込んでいくことは、実習指導上の限界を超える問題があり現状では困難である。

しかしながら、授業に保護者を招聘したように学内で責任ある指導体制のもとあれば、計画的に保護者との関わりを経験する可能性も見えてくる。例えば、学内に保育者養成教育の一環として地域に開かれた子育て支援の場が施設として用意され、そこを利用する子どもや保護者を支援できるスタッフも配置される子育て支援センターのようなものが設置できれば、保護者支援にコ

ミットできる教員の指導のもとで計画的に学生が保護者に関わり専門的な指導を受けながら、実践的な子育て支援を学ぶ保育臨床教育が可能になってくるだろう。また、こうした取り組みは地域の実情・実態を研究的に把握しながらの子育て支援にもなり、大学の研究活動の成果を生かした地域に開かれ、地域に貢献する地域連携の一つの形として保育者養成を担う大学としての役割を果たすことにもなる。地域で子育てに苦悩する保護者の実情を目の前にすると、学内でこうした保育臨床教育が可能となる実践的保育の学びの場が急ぎ必要になってきているのではないだろうか。子育て支援を担う保育者養成に取り組んできた須永は、その教育実践を振り返り「保護者の抱える相談内容は今日多様化し、複雑化しているが現状に対応できる保育者をどのように養成すべきか、保育者養成教育の全体の課題として議論すべき問題」⁷⁾であると述べているように、今後、保育者養成における人材育成のあり方を見直す上で、保育臨床教育ができる教育環境作りが早急に検討すべき課題の一つになっていると考える。

家庭における子育ての実情・実態を整理してみたとき、川崎市宮前区の外国人市民の子育ての中に類似する困難さを読み取ることができる。川崎市の外国人市民の子育て支援活動の中から見える難しさは、「外国籍であることに由来する固有の諸問題と日本人に共通した問題とを多重的に負っている」と指摘されていた。そして、それは、たまプラーザ周辺地域に共通する子育ての困難さの問題を象徴していると考えられるのではないだろうか。文化の異なる土地に移り住んで始める「アウェー育児」は、知り合いも情報もない孤立した子育てにならざるを得ない。外国籍保護者の子育てはその典型であったといえる。子育ての不安や悩みを共有できる身近な人がいないことや、気軽に利用できる施設が見つからないことなどは、この地域における家庭で子育てをする保護者に共通する問題なのである。たまプラーザ周辺地域の家庭における子育ての実情・実態は、今や、外国人の子育ての困難さと同じように、地域の子育て家庭全般に共通する課題になっているのである。新しい地域に転入して始める子育ての生活は、孤独な「異邦人の子育て」になる恐れがある。転入し子育てする人々が異邦人化しない子育て支援は、地域のコミュニティ形成と共に考え実践していく必要があるだろう。大鐘が、地域で子育て支援活動を行った実践から、コミュニティの形成について検討し「行政と地域が協働することによるエンパワーメントは、単一性の動きではなく、双方向でエンパワーメントし合うもので、結果として、地域の子育て支援の質を向上させるもの」⁸⁾であると述べているような子育て支援活動の実践のあり方を保育者養成教育の中で具体的に学んでいけるように計画していくことが必要になるだろう。

今後は、障害のある子どものいる子育てや外国人につながる子どもの子育てなどより多様な子育ての中に置かれている家庭や保護者の実情・実態についても調査を広げ、より多様で具体的な子育て支援の課題や対策について保育の視点の中に取り込んで検討できる資料を用意していく必要がある。そして、より多様で複雑化、深刻化する子育て支援の課題に、大学で育った保育者が実践の拠り所のできる専門的力量を備えていけるように、保育者養成教育カリキュラムの再考も視野に入れた研究を進めていく必要がある。

付記：本研究は、平成29年度國學院大學学部共同研究費の助成を受けた。また、國學院大學人間開発学会第十回大会において学部共同研究の成果報告として本稿の内容の一部を口頭発表している。

謝辞：本研究における調査に御協力頂きました地域子育て支援拠点施設「ラフル」の職員の皆様と利用者の皆様、アンケート調査・インタビュー調査に御協力頂いた幼稚園の教職員の皆様と未就園児クラスを利用されていた保護者の皆様にこの場を借りてお礼を申し上げます。

引用文献

- 1) 野本茂夫・他（2018）平成29年度國學院大學人間開発学部学部共同研究報告書 地域における子ども・子育て支援の実情と大学における人材育成のあり方 國學院大學人間開発学部
- 2) 横浜市衛生研究所（2018）横浜市人口動態統計資料 平成28年 横浜市
- 3) 川崎市総務企画局情報管理部統計情報課（2017）平成28年川崎市の人口動態 川崎市
- 4) 川崎市市民・子ども局人権・男女共同参画室（2016）平成27年度外国人市民意識実態調査（インタビュー調査）報告書「第6章：子育てをめぐる課題」
- 5) 外国籍県民かながわ会議（第9期）最終報告（2016年10月）
- 6) 大豆生田啓友（2013）[展望] 保育の場における子育て支援の課題 保育学研究 第51巻 第1号 134-142 日本保育学会
- 7) 須永進（2018）保育者養成の視点による子育て支援教育について 三重大学教育学部研究紀要 第69巻 教育科学 341-347 三重大学
- 8) 大鐘啓伸（2016）域における子育て支援活動への“コミュニティ感覚”を取り入れた関与 名古屋女子大学紀要 62巻（人・社） 91-104 名古屋女子大学

（のもしげお 國學院大學人間開発学部子ども支援学科教授）

（いけだゆきのぶ 佐賀大学名誉教授・元國學院大學人間開発学部教授）

（いしかわきよあき 國學院大學人間開発学部子ども支援学科教授）

（なつあきひでふさ 國學院大學人間開発学部子ども支援学科教授）

（やませのりこ 國學院大學人間開発学部子ども支援学科准教授）